

野村隆嗣

説教：「嘆きを聞かれる主」詩篇 142 篇

杉並教会の皆様、初めまして。野村隆嗣と申します。東京中会に属するグレースシティチャーチ東京で伝道師をしております。今日皆様と礼拝できることを神に感謝しています。本日は、詩篇の 142 を皆様と共に読んでまいりたいと思います。

私は子供の時に、出された夏休みの宿題が嫌で、嫌で、仕方ありませんでした。夏休みを楽しみたいのに、なんで宿題をしなきゃならないんだろうと、夏休みの最後の週に、追われながらやっていたことを覚えています。特に算数、数学が苦手で、母親に早くやりなさいと、言われ、泣きながら取り組んだことを覚えています。こんな時、神様に助けを求めたくなる時があります。けれど神様が聞いて下さって、本当に取り扱ってくれるのだろうかと心配になることもありました。クリスチャンになった後でも、神が聞いて下さり、本当に私の問題を解決して下さるのだろうかと思ってしまう時がありました。皆さんにも同じように、思い悩んでしまうことがあるのではないのでしょうか。今回お読みする詩篇 142 篇で、ダビデは夏休みの宿題とは、くらべものにならないほどの、生きるか、死ぬかという状況にさらされ、ダビデは嘆きと共に主なる神に助けを求めていました。そのダビデに対して、神はどう導いて下さったのでしょうか。本日は「嘆きを聞かれる主」と題して、詩篇 142 篇を読んでいきます。お読みする聖書箇所は詩篇 142 篇です。

ダビデのマスキール。彼が洞窟の中にいたとき。祈り

1 声をあげて私は主に叫びます。声をあげて私は主にあわれみを乞います。2 私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し私の苦しみを御前に言い表します。3 私の霊が私のうちで衰え果てたときにもあなたは私の道をよく知っておられます。私が歩くその道に彼らは罫を仕掛けています。4 ご覧ください、私の右に目を注いでください。私には顧みってくれる人がいません。私は逃げ場さえも失って私のいのちを気にかける人もいないのです。5 主よ、私はあなたに叫びます。「あなたこそ私の避け所生ける者の地での私の受ける分。6 どうか私の叫びに耳を傾けてください。私はひどくおとしめられていますから。私を迫害する者から救い出してください。彼らは私よりも強いのです。7 私のたましいを牢獄から助け出し私があなたの御名に感謝するようにしてください。正しい人たちは私の周りに集まるでしょう。あなたが私に良くして下さるからです。」

この詩篇から 3 つのポイントでお話し致します。初めに、ダビデは苦難の中にいた時でも、主に助けをもとめました。私たちもまず、なによりも主により頼むべきです。二番目に、主は主を信じるものに、目を注いで下さいます。主はどのような時であっても、信じる者達と共に居て下さるのです。三番目に主だけが、私たちを救って下さる方です。そして私達をどのように救って下さったのか見て行きたいです。3つのポイントを要約しますと、主に抛り頼

み、主が私たちと共に居て、主がわたしたちを、救います。

初めに、ダビデは苦難の中にいた時でも、主に助けを求めました。私たちもまず、なによりも主により頼むべきです。詩篇 142 篇は 150 篇ある詩篇の後半に収められている詩です。フィナーレとも言える、146 篇から 150 篇は、全てハレルヤで始まり、ハレルヤで終わるといふ、主を賛美する詩です。しかし、このハレルヤで始まり、ハレルヤで終わる前、詩篇 139 篇から 145 篇は、ダビデが苦しみ、悲しみ、葛藤などを主なる神に訴えかける詩が続きます。今回お読みする 142 篇はそのダビデの苦しみ、悲しみ、葛藤を語る詩の一つです。

この詩篇には、「**ダビデのマスキール。彼が洞窟の中にいたとき。祈り**」という表題がついています。詩篇の 57 篇にも同じ表題がついています。ダビデが同じ状況にあったときに歌われた詩と言えるでしょう。ダビデが洞窟に居たときというのは、第一サムエル記 22 章から 24 章に出てきます。ダビデは、イスラエルの王サウルに、家来として仕えていました。しかし、サウル王は、ダビデを殺そうとしており、息子ヨナタンや他の家来たちにもダビデを抹殺したいという思いを伝えていました。ダビデが何かサウル王に対して罪を犯したというのでしょうか？ そういうわけではありません。サウルは、主なる神がダビデと共にいて、サウルの娘と結婚までしたダビデが、自分の王権の脅威となっていると感じたのです。サウルはダビデに嫉妬し、彼を殺そうとしていたのです。ダビデはサウルからの逃避行の末、アドラムという洞窟に逃げ込みました。またその後にエン・ゲディという場所にある洞窟にも逃げ込みました。そこで歌われた詩が詩篇 142 篇です。

まず、1 節と 2 節をご覧ください。1 **声をあげて私は主に叫びます。声をあげて私は主にあわれみを乞います。** 2 **私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し私の苦しみを御前に言い表します。** ダビデではこの詩で、声を上げ、叫び、主なる神の前に、嘆きと苦しみを、注ぎ出そうとしています。ダビデは、サウル王に忠実に仕えて来ました。主はダビデと共にいて、巨人ゴリアテ率いる、ペリシテ人の軍隊を破り、イスラエルに勝利をもたらしました。しかし、それゆえに、ダビデは命を狙われることになってしまいました。ダビデは正しいことを行ったのに、命を狙われています。ダビデは自分が受けている嘆き、苦しみを主の前に注ぎ出して、憐みを願っているのです。3 節、**私の霊が私のうちで衰え果てたときにもあなたは私の道をよく知っておられます。私が歩くその道に彼らは罾を仕掛けています。** ダビデは預言者サムエルによって、油を注がれ、主の霊がダビデと共にいました。主に導かれて、勇敢に戦ってきました。しかし、そんなダビデであっても、今の状態は、霊がダビデの内でも衰え果てたような状況と言っているのです。ダビデがこれからどのような道を歩むのか、ダビデ自身もわからないのです。確実なことは、サウルに命じられた家来たちは、罾を仕掛けダビデを捕えようとしているという事でしょう。しかしダビデは、**私の霊が私のうちで衰え果てたときにもあなたは私の道をよく知っておられます。**と歌いました。なぜでしょうか？ 彼は、自分の命が狙われているという危機が迫り、心が嘆き、苦しん

でいる時でも、主なる神のみが、自分のこれから歩む道を知っていると歌ったのです。ダビデは危機的な状況にあっても、絶望することなく、また自らの知恵により頼むのでもなく、主なる神に助けを求めたのです。

150 篇ある詩篇には、主だけに助けを求め、より頼むことの幸い、重要性を問いかけてくれます。そのように歌う詩篇が沢山あるのです。詩篇の 1 篇 2 節と 3 節には、「主のおしえを喜びとし、昼も夜も、そのおしえを口ずさむ人。3 その人は流れのほとりに植えられた木。時が来ると実を結び、その葉は枯れず、そのなすことは全て栄える」詩篇 28 篇 7 節では、「主は私の力、私の盾。私の心は主に拠り頼み、私は助けられた。私の心は喜び踊り、私は歌を持って主に感謝しよう。」とダビデが歌ったとされています。32 篇 10 節には、「悪しき者は心の痛みが多い。しかし、主に信頼する者は恵みがある人を囲んでいる。」と歌います。このように、詩篇は読者たちに、どのような状況にあっても主により頼むことへと、読む人々を招いているのです。

私自身も、主により頼むことが、最善なんだと思わせる出来事に遭遇しました。私がかつてメンバーであった、ニューヨークの長老教会の信徒リーダーの人と、教会のオフィスでお茶を飲んでいました。私たちが話している時にドアを突然あけて、男性が入り込んできました。信徒リーダーの人に話があるということでしたが、私が席をはずそうとすると、その男性は、私もいてほしいということで、その部屋に留まって彼の相談を聞く事になりました。彼の目は明らかに怒りが見えており、すぐにでも怒りが、爆発しそうな雰囲気でした。相談に来た男性は、妻子の関係、仕事の事で怒りを抱え込んでいたようでした。信徒リーダーは、落ち着いて対応していたのですが、入ってきた男性の語気はつよくなり、私は、身の危険さえ覚えるようになりました。私は警察に電話をした方が良くはないかと思ったのです。男性は拳をあげて、殴りかかろうというところまできていたのですが、信徒リーダーはその拳をみても毅然として、「僕たちの力で解決できない、主が必ず解決してくださる。今は一緒に祈りましょうよ。」と問いかけました。その言葉を聞いた時、その男性は握りしめていた拳を緩めて、力なく、信徒リーダーの男性を方に腕が寄りかかりました。男性を椅子に座らせ、リラックスさせた後、彼の為に祈るという時をもち、彼はその後コーヒーを飲んで帰っていきました。信徒リーダーはその後、私に対して「彼の怒りに、怒りで対抗する事も出来るだろうけれど、それは正しくない、神だけが、本当の問題を解決してくださるから、そこによりたのまないね」と言っていました。いまだにその出来事は頭によぎることがあります。

皆さん、ダビデは困難や苦しみの中で、主だけにより頼みました。私達も困難や苦しみにあっても、主に拠り頼むべきではないでしょうか。私達には、私達たちの力だけでは解決する事の出来ない問題があるのです。私達たちが、それらの問題を自分の力、能力で解決しようと試みる時に、失敗や自己憐憫に陥ってしまうでしょう。私達は、もがく事をやめて、主に拠り頼んで、おたずねしましょう。主は主の定めるその時に、確実にその問題を解決へ導くお方だからです。まず私達たちは、主だけにより頼みましょう。

私たちは、主だけにより頼みましょう。そして主は信じるものに、目を注いで下さいます。主はどのような時であっても、信じる者達と共に居てくださるのです。4節を見て下さい。ご覧ください、私の右に目を注いでください。私には顧みてくれる人がいません。私は逃げ場さえも失って私のいのちを気にかける人もいないのです。ダビデは自らの思いを注ぎ出して主に祈っています。私には顧みてくれる人がいません。私は逃げ場さえも失って私のいのちを気にかける人もいないのです。と歌っていますが、実際はそうではありませんでした。ダビデの妻ミカルは、ミカルの父であるサウル王がダビデを殺そうとしていた時、ダビデを逃がして守りました。また彼の命を狙っていたサウル王の息子、ヨナタンは、ダビデを愛していました。ヨナタンは父、サウルに対して、ダビデのことを弁護しました。しかし、今ダビデは、守ってくれた人たちからは離れて、洞窟の中にいます。ダビデを愛し助けてくれる人はいました。しかし、ダビデは逃避行の時、様々なことを一人で取り組まざる負えなかったのです。逃げた直後、ダビデは、ノブという街にいた、司祭アヒメレクの所に一人で逃れ、空腹であったので、聖別されたパンをもらい、護身のために、ゴリアテの剣を受け取りました。しかし、その後彼が逃れたのは、なんとイスラエルの敵であるペリシテ人が住むガテと呼ばれる都市の王、アキシユの所でした。しかし、王の家来に簡単に見つかってしまい、気がおかしくなってしまったふりをして、何とか逃れました。ダビデはこの逃避行の危機を一人で乗り越えなくてはなりません。ですので、ダビデは**私には顧みてくれる人がいません。私は逃げ場さえも失って私のいのちを気にかける人もいないのです。**と歌ったのです。そして、ダビデは、主に対して、**私の右に目を注いでください。**と神に歌い祈っています。右というのは、最も信頼し頼りにしているものを指しています。日本語でも「誰々の右腕」という表現があります。ダビデは詩篇 16 篇で「**主が私の右におられるので 私は揺るがされることはありません。**」と歌っています。しかし今ダビデは、そのように信頼できる人がいないのですと歌っているのです。

このダビデのように、皆さんの中にも、誰か一緒にいてほしいのにも関わらず、一人孤独で、何かに向かって行かなければならないという状況があるのではないのでしょうか。コロナ禍という状況の中で、今までチームで取り組んでいた仕事などを、自分だけで、取り組まなければならなくなった。様々な悩みや葛藤があって、誰かに聞いてほしいのに、自分で孤独に過ごさなければならないなど、孤独に立ち向かうという状況があるのではないのでしょうか。ダビデもそのような状況であったそうです。しかし、ダビデはこの孤独と命の危険という状況下の中で、主なる神に祈り求めました。私の右に目を注ぎ、主よ、ともにいて下さいと願い、祈り求めたのです。主はそのような孤独なダビデの嘆きを聞いて、ダビデと共にいて下さったのです。

ダビデと同じような孤独を味わった人がいます。私たちの救い主、イエス・キリストです。彼は十字架にかかる前の夜、ゲッセマネという園にいて、弟子たちを少し離れた場所で祈るようにいわれながら、一人きりで、父なる神に対して祈られました。イエスは、父なる神に対し

て、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてくださいと祈りました。杯とは、イエスがこれから十字架で、神の怒りを受け、苦しまれることを指しています。しかしイエスは、他に方法が無いのでしょうかと父なる神に祈ったのです。弟子たちは祈ることができず、眠ってしまいました。父なる神の御心はイエスを十字架につけることでした。イエスも神の御心がなりますようにと祈りました。そして、十字架へとイエスは進んでいったのです。イエスは孤独でありました。しかし、そのような状態にあっても、神は常に共にいて下さったのです。

皆さん、このコロナ禍の状況にあって、一人で仕事をする、一人で何かに取り組むなど、孤独な状況になる事が増えたのではないのでしょうか。誰かこの状況を解決してほしい、助けてほしいと感じるとき、孤独感を強く覚えるのではないのでしょうか。しかし、私たちが、孤独や困難、葛藤の中にあっても、主はともにあなたといて下さいます。そしてあなたの右に目を注いで下さいます。主は、信じる者たちに対して、聖霊という神を送って下さいました。聖霊は「助け主」です。私たちの葛藤、うめきのような祈りを聞いて下さる方なのです。私たちがどんな孤独や、困難の中にあっても、神は聖霊を通して共にいて下さるのです。ですから、どんな時であっても、まず共に居てくださる主に祈りましょう。主は誰よりも優れた答えや、解決をあなたに与えて、あなたを動かして下さるお方なのです。

主は、私たちと共にいて下さいます。そして、主だけが、私たちが本当に救ってくださる方です。そして私たちがどのように救って下さったのでしょうか。5節をご覧ください。**5 主よ、私はあなたに叫びます。「あなたこそ私の避け所生ける者の地での私の受ける分。洞窟の中で孤独を経験していたダビデですが、主に祈り叫びます。その言葉は、あなたこそ私の避け所生ける者の地での私の受ける分。預言者サムエルは、ダビデを、「主ご自身の心にかなう人」と第一サムエル記 13 章 14 節で語りました。そのサムエルの言葉通り、ダビデは主を頼り求めるという人生でした。ダビデは、主だけが、どのようなことがあっても、逃げ戻り、守り導く避け所であると告白しました。また、ダビデは主を、生ける者の地での私の受ける分。」と告白しています。ダビデには親友、妻などに恵まれていましたが、その他のだれよりも大事にしていたのは、主なる神との関係でした。主なる神こそが、ダビデにとって、この世界の中で与えられた最も良い物であるという告白でした。そして、6節から7節をご覧ください。**6 どうか私の叫びに耳を傾けてください。私はひどくおとしめられていますから。私を迫害する者から救い出してください。彼らは私よりも強いのです。7 私のたましいを牢獄から助け出し私があなたの御名に感謝するようにしてください。正しい人たちは私の周りに集まるでしょう。あなたが私に良くして下さるからです。」**ダビデは、主に対して、迫害する者の手から救い出してほしいと願い求めました。ダビデを迫害していた王サウルとその家来たちが、ダビデの命を狙い、追いかけてくるからです。そして7節には、たましいの牢獄から助け出して下さいと祈っています。ダビデは祈っていたとき、洞窟にいて牢獄にはいません。しかし、ダビデの罪を犯していないのに自由の身ではなく、命狙われ追われているというのは、たましいが牢獄にいる状態と捉えることもできるので**

はないでしょうか。彼はそこから助け出されて、主を喜んで感謝したいという思いを持って祈りました。またダビデは、「正しい人たちは私の周りに集まるでしょう。あなたが私に良くしてくださいからです。」とこの詩を閉じています。彼はたましいの牢獄にとらわれているような状態であったとしても、ダビデは神がいつも共にいて、この状況から救い出し、ダビデと意思を同じくする人々も集まってくるだろうということを望んでいるのです。

ダビデは、この後、エン・ゲティの洞窟でサウルに遭遇します。しかしダビデは、サウルを殺そうとはしませんでした。ダビデは主に油注がれた方、主君に手を下すことは絶対にありえないと、サウルに対して復讐することは無かったのです。サウルはこの後、ペリシテ人との戦いの中で壮絶な死を遂げました。そしてダビデはイスラエルの王となりました。

主なる神は、ダビデを救われました。たましいの牢獄から助け出して下さいました。そして、主は私たちをも救って下さるのです。私たちは何か救われるのでしょうか。神は私達を、「罪による死」から救って下さるのです。私が救われた時も、罪による牢獄、死から救って下さったのだと実感しています。私は救われる前に、同居していたルームメイトと車に関してトラブルとなり、約60万円の借金を抱えていました。20代半ばでしたので、私にとって60万円というのは、一人の力で頑張っても返済できないというお金ではありませんでした。私は自暴自棄になっていました。ただ私はトラブルとなったルームメイトに連れられて教会にいったことがあり、聖書だけは手元にあったのです。ある夜、そのルームメイトが私に対してさらに借金を作りました。もうだめかもしれないと思った時、私の手はなぜか、パソコンに向かい、「聖書の言葉」とタイプしていました。そしてパソコン画面に出てきたのが、マタイの福音書17章20節でした。私はその時初めて、神に対して「聖書の神よ、彼方が本当の神であるのなら、私にあらわして下さい。」と祈りました。その後すぐに、私の心に不思議な安心感が与えられたのです。私のトラブルは解決しておらず、さらに状況は悪くなっていたのですが、私は、そのトラブル、私の罪による牢獄、死から救われたと知った瞬間でした。その後、聖書を手に取り、私のためにイエスが、どのようにして十字架で私の罪を贖われたのかを改めて、聖書から学びました。そして、借金も4年掛かりましたが、全て返済することができたのです。

皆さん、この詩篇142篇のダビデは、主なる神に対して、たましいを牢獄から救い出して下さいと祈り求めました。そして神はダビデに対して働いて下さいました。そして、私たちにも、罪による死から救い出してくださいました。どのようにでしょうか？それは、私たちの救い主、イエス・キリストを通してです。主なる神は最愛の御子イエス・キリストを、この世に遣わされました。そして、十字架につけられ、人の罪を贖い、罪による死から私たちを救ったのです。イエスは3日目に復活し、死からの勝利を宣言されました。

私たちは、私たちの嘆きを聞いて、罪による死から私たちを救い、神への憩いへと招き入れて下さったイエス・キリストを褒めたたえるべきです。そして、日々罪を悔い改め、イエスにより頼みましょう。ダビデが常に神により頼んだように、私たちも神により頼むとき

どんな危機の時でも揺らぐことのない、安心が与えられるのです。

祈りましょう

私たちの愛する父なる神様。この詩篇 142 篇を通して、あなたは嘆きの時にあるダビデにたいして常に目を注いで、共に居て、彼を救ってくださった事を見ました。そして私達に対しても、常に目を注ぎ、聖霊と共にいて下さって、私たちを救ってくださったことを心から感謝します。今あなたとの、平和、憩いに留まらせてくださいますように。私たちにも、ダビデのようにどの様な時にも揺らぐことなく、あなたをより頼む信仰をお与え下さい。

ただ、彼方だけが、私達を様々な世にある、私たちの心の内にある、罪による死から、解放してくださる方です。あなた様が最愛の御子、イエス・キリストを送って下さり、十字架の上で「罪による死」から私達を救ってくださったことを感謝します。私たちは、迷いやすい羊のようです。あなたの呼ぶ声に耳を傾け、あなたに向かって歩むものとなさせてください。私達の愛する主イエス・キリストの御名前によってこの祈りを捧げます。アーメン。